

産業史における「好奇心」の持つ意義について

——江戸末期の日本と清国との比較——

谷 光 太 郎

- (一) はじめに
- (二) 産業振興の根本は「好奇心」
- (三) 日本の場合
 - (i) 西洋人が見た日本人の「好奇心」
 - (ii) 日本人の「好奇心」の淵源
 - (iii) 指導者の「好奇心」の強さの一例
 - (iv) 幕末期の海外留学生派遣
- (四) 清国の場合
 - (i) 中国の伝統的考え方
 - (ii) 中国の政治思想に大きな影響のあった科挙制度
 - (iii) 清朝末期の外国文化への「好奇心」
 - (iv) おわりに

(一) はじめに

筆者は半導体関連の研究所で10年間仕事をし、多くの体験を得た。トランジスタ発明の経緯、ICやマイクロプロセッサの誕生の意義、日米半導体摩擦や半導体開発のための官民共同の国家プロジェクトの推移等を半導体産業の現場で考える機会を得た。特に筆者の関心をひいたのは、1947年にトラン

ジスタが発明されたというニュースが世界中に知らされたにもかかわらず、その後、日本以外の国で半導体産業が大きく成長しなかったのは何故だろうか、という疑問である。

その疑問に対する答えを筆者は近刊の拙著「半導体産業の軌跡——日米攻防の半世紀——」で次のようにまとめてみた。

(1)日本人のきわめて強い好奇心（古代より自らを辺境文化と考え、海外の文化の中心地から積極的に学ぼうとしてきた伝統）。

(2)トランジスタ発明のニュースがもたらされた時期、日本にはすでにその技術の種を受入れる技術的土壌があったこと（昭和初期から東北大学を中心にエレクトロニクスの分野で世界的レベルに達していたこと）。

(3)この技術を使って新しい商品を作り出す積極果敢な事業家がいり、新しい需要の市場を創造していったこと。このため、半導体市場が創出されたこと（ソニーのトランジスタ・ラジオや、シャープの電卓など）。

(4)西洋やアジア諸国に多い、もの作りを蔑視する思想が日本にはなかったため、半導体製品を大量生産するために不可欠の優れた、(イ)工場管理者、(ロ)技術者、(ハ)作業者が存在していたこと。

種がころがっていても、自分で作ってみようかという関心がなければ、それで終り。関心があっても、その種に適した土壌のない砂漠ではどうしようもない。また、水をやり種を発芽させ、これを増やし、育てる意欲のある人がいないと、芽は育たぬし、この木を増やすことはできない。さらに、黙々と雑草を取り、間伐し、枝打ちをする作業を貶む風土のところでは経済的価値のある良材を産出することはできない。

この4つの要素がそろっていたのは日本だけだった。

日本人が物真似がうまかったからできた、などという単純なものではないのである。

また、発展途上国などで、産業を興したり、振興させたりするには、先進国から技術を導入したり、産業技術振興を担当するお役所を作って、この役所が強力にリードすればよい、といった議論がよく聞かれるが、そんな簡単

なことではもちろんない。役所を作ることなどは比較的簡単だ。技術の導入でも、金を出す決心さえすれば、技術導入契約など1日でできる。また産業振興のための法律を作ればよいという意見もある。それで産業振興ができるのならこんな簡単なことはない。

筆者は半導体産業に限らず、上述(1)~(4)は一般の産業にも適用できるのではないかと思う。また、上述(1)~(4)は数学化したり、具体的にこれこれと限定がむずかしいという点はあるが、産業史という視点では欠かすことのできない重要なことだと考える。

近代工業が西ヨーロッパと北米を除いて、日本だけに根づいた理由もここにあるのではないかと考えている。

この近代産業の発展に関して、東アジアの中心国中国（清国時代）と日本（江戸末期）を比較して考えてみたい。

清国はいうまでもなく、「地大、物博、人多」を誇る大国であり、歴史の長い国である。西洋の強国からの影響も日本より早かった。

西洋強国の力のシンボルは蒸気船の黒船であった。黒船は世界各地を航行し、世界中の人々はこれを知ったわけであるが、これを作れるようになったのは西ヨーロッパ、北米の限られた国々と日本だけだった。飛行機についても同じことがいえよう。

なぜこのようなことが大国清国でできず、小国日本でできたか。この理由は、現在の生きた産業史を考える場合有益なことと思う。

本論文は、前述(1)の好奇心についての、分析であり、その分析対象の時期は、近代工業が日清両国に移入される直前の日本の場合は江戸末期、清国の場合は清の末期の両国の特色を中心に考えた。それは、西洋式の各種の思想や工業が大々的に導入されず、諸外国との交流も少なかった時代の方が、その国の文化の特色をよく残していたと考えるからである。

なお、前述(2)の技術水準の問題、(3)の企業家の存在の問題、(4)の一部の国々に根強い、物作り職業への強い蔑視の問題については稿を新めて論じたい。

(二) 産業振興の根本は「好奇心」

筆者が日本の半導体産業史を研究して強く感じたことは次の三点だった。

- (1) 産業はその国の文化伝統と切り離しては考えられないこと。
- (2) 新規産業が興るかどうかの基本は、「好奇心」にあること。
- (3) 日本人の文化の特色は「好奇心」にあるのではないか。

トランジスタが発明されたというニュースは、米ベル研究所で公式発表があった直前に日本にも入ってきていた。公式発表後、日本人が知ったのは米週刊誌によってであった。終戦直後の1948年のことである。それはもちろん日本だけでなく全世界に知らされたが、海の物とも山の物とも分らないこの発明は世の関心も薄く、ごく小さなスペースで報道されていた。

しかし、このごく小さく報道されたことに大きな関心を持った人々がいた。東北大の弱電研究関係者や、通産省の電気試験所、電電公社（後のNTT）の電気通信研究所関係者である。

トランジスタ発明のニュース以降のこれら関係者の動きを説明するには「溢れるばかりの好奇心」という以外の形容詞は、見当たらない。これらの人々の動きからまず思い出されるのは、江戸時代の蘭方医杉田玄白らによるオランダ語の解剖書の翻訳への苦闘を綴った「蘭学事始」である。

戦国期の鉄砲伝来の時も同じような現象が見られる。

天文12年（1543年）種子島にポルトガル船が漂着した。乗組のポルトガル人が奇妙なもの（鉄砲）を持っている。

島主種子島時堯^{ときたか}は16歳の若者であったがこの鉄砲に興味を示し、二千金という大金を投じて二挺買い入れ、家臣に火薬の製法を、島内の刀鍛冶に鉄砲の製法を研究させた。

さらに、この鉄砲を伝え聞いた紀州根来寺の一僧侶、堺の一商人が千里の道を遠しとせず種子島に来て、その製法を学んだ。そうして日本はたちまち、世界最大の鉄砲生産国となってゆく。

好奇心がなければ、鉄砲も異人のおもちゃとして、そのままになっていただろうし、苦勞してオランダ語の医学書の翻訳にエネルギーを注ぐこともなかろうし、トランジスタ発明のニュースも、そのまま流れていってしまっただろう。実際、大多数の国ではそうであった。オランダ語の医学書の翻訳と公刊をやったのは日本だけだった。産業振興の基本は、新しい事物への国民の好奇心であり、自分でも作ってみようという意欲である。これがない限り、自主的な産業振興は無理とってよい。

その国民の特色は一朝一夕にでき上るものではない。日本人の「好奇心」の強さは、特に西洋人の目から見れば顕著なものがあつたようだ。代表的な人々の日本人観を次に引用してみたい。

(三) 日本の場合

(i) 西洋人が見た日本人の好奇心

日本に来た西洋人の最も古い時代に属する人はフランシスコ・ザビエル(1506~1552)だ。彼は本国への報告書で、「これまで、今までに発見された中で、最も優れた国民である。キリスト教の信仰に入っていない人々の中で、日本人にまさる国民は見当らないであろうと思われる」と書いている。

また、ザビエルの本国への手紙に関心を持ち、日本へやってきたルイス・フロイス(1532~1597)は、日本人の性質を、名誉を重んずる、貧乏を恥としない、といった点をあげ、「一番特徴的なことは知識欲が他の国民と比べてけたはずれに旺盛である」とした。

江戸期になると、日本に来るのはオランダ人だけに限定されるが、1775年から67年にかけて、蘭船医の資格で来日したカール・ツンベルグ(1743~1828)は、その著「日本紀行」で、日本人の特質として特に知識欲、好奇心については驚ろくべきものがあるとし、「ヨーロッパ人の持っている物、身

につけている物、あらゆる学問—数学、地政学、物理学、地理学、薬学、動物学、植物学、医学など——何でも徹底的にマスターしようとする」と書き、総じて「日本人が特に優れた資質を発揮するのは、実務的、実学的な面である」としている。

また、有名なシーボルト（医者、博物学者）は、その著「日本」で、「他のアジア諸国において、日本のように旅行が生活の中に高いウェートを占めている国民というのではない」と書いている。

道路網の整備と治安のよさ以外に、国民に好奇心が旺盛であったからだろう。

以上は、宣教師や医者によるものだが、幕末期に来日した、軍人や外交官の目には日本人はどう映ったのだろうか。

日本の開国を強要した米海軍のペリー提督は、その「遠征記」で次のように書いている。

「实际的、機械的な技術について、日本人はたいした腕前を持っている。彼らの道具の粗末さや、機械に関する彼らの不完全な知識を考えあわせるとき、彼らの手の器用さは驚ろくべきものといわざるを得ない。日本人の職人は、世界のどこの職人にも劣らず優れており、この人々の発明的能力が自由に発揮された暁には、日本人は第一流の製造国としての躍進をとげるであろう。他の諸国民がなしとげた物質的進歩の結果を知ろうとする彼らの好奇心と、それを自分の用途に適応する意欲は、もし現在彼らを他国との交流から締め出している政府の方針がゆるめられるとすれば、この国をたちまち世界の最も恵まれた国々と並ぶレベルに押し上げるであろう。文明世界が、過去および現在なし遂げたものを手に入れたならば、日本人は、将来における機械分野の成功をめざす強力な競争相手として登場するであろう」

日本では、ペリーは黒船を率いて開国を強要した人としてしか理解されていないが、米海軍の近代化と蒸気艦化に最も積極的だった提督で、蒸気海軍の父

(The Father of Steam Navy) と呼ばれた。海軍士官の系統的教育・育成に熱心で、アナポリスの海軍兵学校 (Naval Academy) 設立のため、時の海軍長官バンクロフトに答申案を書いたメンバーの一人である。技術に関心の深い提督だった。

清国の福建と上海で領事をし、安政6年(1859年)総領事として来日し、翌年公使に昇格したサー・ラサフォード・オールコックは、辛辣な日本人評を行っているが、日本人の技術能力に関しては次のような評価をしている。

「物質文明に関しては、日本人がすべての東洋の国民の最前列に位することは否定し得ない。機械設備が劣っており、機械産業や技術に関する応用科学の知識が貧弱であることを除くと、ヨーロッパの国々とも肩を並べることができるというよかろう。したがって、われわれの方としては知識を十分に持ち、より高度な文明を有しているという強みがあり、蒸気と水力による機械を持ち、すべての機械設備は驚ろくほど完全であるが、もし日本の支配者の政策がより自由な通商貿易を許し、日本人をして、バーミンガム、シェフィールド、マンチェスターなどと競争させるようになれば、日本人はそれにひけをとらず、シェフィールドに迫る刀剣や刃物類を作り出し、世界市場でマクリスフィールド(マンチェスター近郊の絹製品の産地)やリヨンと太刀打ちできるだけの絹製品や縮緬製品を産出するだろうと私は信じている。……

日本人はどういう点で外国製品が優れているか、どうすれば自分達も立派な製品を作り出すことができるか、ということを見出すことに熱心であるし、また素早い」

オールコックの前任地は清国であった。彼は常に清国と日本を比べて考えたであろうし、日本人と清国人のちがいは何かが念頭にあったに違いない。

オールコックより半世紀前の文化8年(1811年)に来日して、2年間監禁されたロシアの海軍軍人ゴローニンは次のように書いている。

「(日本は)人口が多く、聡明犀利で模倣力があり、忍耐強く仕事好きで、何でもできる国民のうえに、もし、わが国のピョートル大帝ほどの王者が

(日本に) 君臨したならば、日本の胎内にかくされている余力と資源をもって、その王者は多年を要せずして、日本を全東洋に君臨する国家たらしめるであろう。その暁には、遠く離れた国々(ロシア)の保護を受くべきアジア東岸(沿海州)およびアメリカ西岸の各地(ロシア領アラスカ)はどうなるであろうか」(かっこは筆者記入)

万延元年(1860年)から文久2年(1862年)まで、オイレンブルグ伯爵の通商条約締結のための使節団員として来日したエルベ号艦長のウエルナー(Reinhold Werner, 1825~1909; 1845年プロセイン海軍に入り, 1874年海軍少将)は下記のような訪日記を書いている。なおオイレンブルグ伯はこの訪日時に、日本・プロセイン間の通商条約を締結した。

「日本の学問それ自体は清国よりずっと高い水準にある。日本人は発展途上の文化的民族であり、隣国の清国人よりすぐれた偉大な精神的特質を備えている。日本人はおのれ自信を過大評価することなく、(清国人のように)自分を地球上で唯一の教養ある民族であるとみなす笑うべき尊大さを持っていない。

その逆に、日本人は喜んでヨーロッパ人の優越性を認識し、ひるむことなくヨーロッパ人を師と仰ぎ、彼らの行動や書籍からおのれ自身が知らないことを習得しようと努めている。その際、日本人の異常なほどの模倣能力がきわめて役立っている。しかも、この能力は清国人におけるように、機械的、形式的なものに制限されず、理念や精神の理解にまで及んでいる。

日本人の好奇心は異常に強い。そして、猜疑心の強い幕府の出先機関によって立聞きされる心配のない時には、彼らは外国人に質問することによって、あらゆる方式で、おのれの知識の蓄積を増やしていこうと努めている。」(かっこは筆者記入)

「はじめて江戸の街路に出た時、私は思わず広州と比較していた。そして、長崎でもそうであったように、街路、民衆、家屋を一瞥しただけでも日本人

と清国人は決して同じ民族に属しておらず、しかも同一の文化段階には立っていないことが分った。日本は清国をはるかに凌駕している。そのことについては何ら疑う余地もない。さらに、もし日本がこの200年間、清国のように文化的なヨーロッパ諸国と交渉を保っていたならば、これらヨーロッパ諸国同様の水準に達していただろうと思う。清国を経て来た人々が（日本の）これらの道路に接して驚ろかされることは、その広さとすばらしく清潔なことである。」（かっこは筆者記入）

ウエルナーは、その他、日本には本屋がいたる所にあることなどの見聞を書き、召使い女達が手紙を書いていることや、ボロをまとった肉体労働者が読み書きができることに驚いている。これは、中近東、インド、清国はもちろん、当時のヨーロッパ各国では、その識字率からいって考えられぬことだったからである。

また、日本人のドイツ語修得の熱意についての一例を書いている。オイレンブルグ伯の随行団には植物学者もいたが、日本の植物の名前を全てドイツ文字で記し、しかもきわめて正しく、正確にきちんと書くことに特別の喜びを見出していた柴という日本人のことを書いている。柴は長崎で4週間プロイセンの植物学者からドイツ文字を習っただけであった。柴はオランダ語を習っていたので、このような短期間でドイツ文字の習得が可能であったのだろうが、とにかくウエルナーは柴の好奇心と熱意に驚ろいている。

自然科学以外でも日本人の好奇心の強さを示す次のようなエピソードを書いている。

プロイセン国王から將軍への贈物の贈呈にあたり、オイレンブルグ伯爵は随行団の主だった者を幕府の役人に紹介した。その中にフォン・ブラン少尉いた。すると、幕府の役人の一人は、「この人は『三兵答古知幾』の著者ではないか」と尋ねた。

「三兵答古知幾」は、実はこのブランド少尉の父親ハインリヒ・フォン・ブランドが1833年にプロイセンで刊行した兵術書でこれのオランダ語訳を、高野長英が島津斉彬の求めに応じて、潜伏中の宇和島で嘉永3年（1850年）

に訳了し、27巻15冊が安政3年（1856年）に出版されていた。オランダ語の本からの重訳とはいえ、原著発行の20年後には日本で翻訳出版され、幕府の無名の役人までが読んでおり、プロセインから来た士官のブランドを紹介された途端、この本の著名ではないか、とピンと来たというのである。

この本の三兵とは、歩兵、騎兵、砲兵をさし、タクチーキとは英語のタククスすなわち戦術である。

日本人の好奇心の強さについては、最後に、函館領事だった米人のホジソン（Christofer P. Hodgson (1821~?)）の言葉を書いておく。

「日本人全体としては模倣の才に富んでいて何でも作る」

「他所に自分の品物よりも優れたものがあれば、これを作らないではやまない」

(ii) 日本人の「好奇心」の淵源

戦国期から江戸末期にかけて多くの西洋人が指摘しているような日本人の強い好奇心の淵源はどこにあるのだろうか。山本七平氏の次のような指摘を我々は容易に首肯し得る。

「さまざまな文化的蓄積が我々の履歴の中にあるが、その基本となっているものは、日本人は自らを辺境文化と規定し、文化の中心を日本の外に置いて、その方を見つめ、そこから積極的に学びとろうとした伝統を持っていた。（中国のように）いわば自国文化を絶対化して他を無視もしくは排除し、そのため自家中毒に陥って衰退をきたすことがなかったことである。そして、外に絶対性を置いたがゆえに、目を転じて他から学ぶことも可能であった。」

日本には、常に強い好奇心をもって中心文化の方を眺めてきた伝統があった。

谷沢永一氏は、日本文化の特色を、中国、朝鮮と比べ、次のように分類している。

(1) 中国文化。黄河の流域のごく一部に発生した文化を頭から中華と考えた、自然発生的中華文化。

(2) 朝鮮文化。自分のところで中華文化はできなかったが、その中華文化の最も優等生であり、その純粹培養であるから自分の所は絶対であると考え、自国文化抹殺型エセ中華文化。

(3) 日本文化。自国の文化というものを、さしたるものでないと思いつつも、絶対それを抹殺しないで持ち続けながら他国の文化を次から次へと取り込む。

日本文化の特色の一つは、朝鮮のように他国の文化を絶対視したことが一度もないことだ。中国文化はどんどん取り入れたが、決して取り入れなかったものもある。中国宮廷政治に影響力が大きかった^{かんがん}宦官制度、中国政治体制だけでなく文化・経済にも測り知れない影響力のあった、科挙制度、それに社会風俗としての婦人の^{てんそく}纏足である。

また、中国で唯一正統の学問となった朱子学も江戸時代に日本に入ってきたが、日本ではそれ以前の古学を中国（従って朝鮮も）のように抹殺しなかった。古学の伝統を保持しながら朱子学を取り入れた。元禄期になると、伊藤仁斉は古学と朱子学を比較検討して、古学の方が優れている、としている。

ある特定文化を絶対化することがなかったことは、朱子学を唯一正統の学問として他を禁じなかったのと同様、仏教が伝来して後も太古から神道は残り、儒教が入ってからも仏教は残った。キリスト教が禁じられたのは、その布教行為の裏にスペインやポルトガルの植民地化政策があるのを明敏な日本の指導者が気づいたことや、この宗教の唯一絶対的な考えが日本人の反発を招いたからであろう。

角度を変えてみれば、それはいいかげんな文化ともいえる。神道も、仏教も、儒教も、キリスト教も、日本では併存している。お宮参りに行き、クリスマスの習慣の一部を取り入れ、論語を読み、葬式にはお寺の坊さんと呼ぶ

ことをごく自然にやっている。

とにかく、好奇心旺盛で特に不都合と考える場合を除き、何でも取り入れる。

自身を辺境文化と考えているから、世界で最も進んだ文化の中心地はどこか、ということは常に気をつけている。そのための情報はどん欲に収集する。江戸時代にもオランダ語を通してヨーロッパ情勢をきわめて正確につかんでいた。そうして、第一級の文化を吸収しようと貪欲なまでの知識欲を示した。

明治になってから、それまでのオランダ方式を弊履を捨てるように捨て、ドイツ（陸軍、医学、理化学）、フランス（細菌学、芸術）、イギリス（海軍）へ鞍がえしたのもその表れであろう。

(iii) 指導者の好奇心の強さの一例

好奇心の強さは一般庶民だけではなかった。領主の好奇心の強さを示す例として、佐賀藩主鍋島直正（閑叟）と薩摩藩の島津斉彬の二人をあげてみよう。

鍋島閑叟は西洋の自然科学や医学に強い関心を示し、藩内に西洋式の工場を建てたり、嫡子直大（淳一郎）や長女貢姫に種痘をさせた。また、蒸気船や砲術、航海術を知るため、次のように数度にわたって長崎でオランダ船に自ら乗り込むなどして見学している。

(1) 弘化元年（1844年）9月

31名の家臣を伴い、オランダの軍艦パレンバン号に乗組み、5時間にわたって大砲の操作や軍事訓練の様子を見学。

(2) 嘉永7年（1854年）4月

長崎出島のオランダ商館を訪問し、8時間の長時間、軍事、科学についての詳細な説明を商館長より受ける。

(3) 嘉永7年8月、オランダの蒸気艦スンビン号を訪問し、備砲、蒸気機関、蘭海軍の訓練法、軍事戦略等の説明を受けた。

この時、閑叟は、当のスンビン号を購入したいと申し出、オランダ側をあ

わてさせている。

(4) 安政元年(1854年)と安政2年, オランダ軍艦ヘデー号に乗組み, 藩士たちに航海, 造船, 砲などの実地見学をさせた。

なお, 閑叟は, 各種の情報から今後はオランダ語よりも英語が重要と考え, 従来の蘭学寮以外に, 慶応元年(1865年)「致遠館」を設けて藩士に英語を学ばせている。

薩摩藩主島津斉彬の好奇心の強さも我々を驚ろかせるに十分だ。当時の有名な蘭学者は殆んど斉彬の寵遇を得ている。斉彬は特に高野長英の才を愛し, 長崎に蘭書を注文する時はいつも高野の意見を聴した。蛮社の獄で入牢の後, 脱獄してお尋ね者として各地に隠れ住んだ時も, 援助の意味も含めて, 多くの翻訳を依頼している。特に, 前述のプロイセン人ブラント著による歩, 騎, 砲の操縦及び実戦法を体系的に記述した「三兵答古知幾」を蘭訳から重訳させたこともある。

斉彬はローマ字日記も書いた。この日記によれば, 高野長英の潜伏中もその所在地を知っていた。

日頃から家臣を長崎に遣わし, 舶来の書籍器械はもちろん, 舶来物は価のいかんを問わず購入させ, 原書は直ちに翻訳させた。

某日, 化学関連の新書が舶来したが, 価すこぶる高価との連絡に対し, 斉彬は, 物理, 化学の二学は経済の根本で, 今後はこの二学を講習して経済の道が初めて立つべきだ, 価の高下は論ずるところではない, として直ちに求めさせた。そうして, 蘭学者川本幸民に翻訳させている。「舎密読本」と名づけられた30余巻の大著である。

鍋島や島津といった外様の大藩の藩主以外でも, 幕閣の閣老達も職務の必要性から西洋事情には特に強い関心を示した。信州上田藩守真田幸貫は老中就任の折, 家臣佐久間象山に命じて西洋事情を調べさせようとしたことは次の象山の進言書(「時勢に関する幕府宛上書稿」)に明らかである。

「先主人信濃守(真田幸貫)御加判の列仰せ付けられ(老中就任)海防掛

をも仰せ蒙り候砌、私義に内意仕候は、およそ防海の要、彼を熟知し候より先なるはなく候へば、これより欧羅巴諸州の記載に涉り、彼の紀綱、政治、兵制、民俗、何れによらず記憶罷りあり顧問の用を弁じ候やうとの義につき、その頃まで翻訳に相成候洋書の類を取り集め、一読仕り候義に御座候。然る所、何程の義も相分らず、毎々に隔靴搔痒の嘆きを免れず、追々和蘭の原書をも読習ひ候義に御座候」(かっこは筆者記入)

鍋島閑叟や島津斉彬が自国領内に理工学の実験所や工場を作らせたことは有名でもあり、ここでは省略する。

(iv) 幕末期の海外留学生派遣

日本人の好奇心の強さを示す一例は、幕末期の海外留学生である。

薩摩では五代才助が藩主直々の西洋出張を、「恐れながら、太守様御乗艦御航海遊ばされ、御巡見第一に英国都府の攻戦防襲の弁理御熟覧候やう御座ありたく」と進言している。斉彬の死により、その実績には至らなかったが、五代の次のような構想は後に実現する。国禁の海外渡航でもあり、留学生は全て変名を使い、後に明治政府の大官になった人も多い。

(1) やがて家老職に就くべき者、御軍賦役の者、攘夷説を唱える壮士。全員で9名。

英仏の軍務、地理、風俗を見聞させる。

(2) 郡奉行の者1名。英仏の農耕に用いる機械を調査研究する。

(3) 台場、築城、砲術に心得のある者2名。英国の砲台、築城、大砲、小銃などの製造法の概略を学ばせる。

(4) 藩校造士館より1名。英仏の諸学校、病院、幼院、貧院などの所置を研究する。

(5) 工作、機械などを取扱う者で、絵図面作成が達者な者、3名。

彼らは、わが国にとって特に必要不可欠な人材で、その責務は英仏の機械取扱方を覚え、絵図を写してくること。

(6) 通訳1名。

以上17名を英仏へ渡航させ、同地で150日ほど滞在させ、与えられた課題を研究、報告させる。

五代の構想は、体系的具体的であった。

なお、「近代日本の海外留学史」石附実著によると、幕末の海外留学生は152名におよび、幕臣（32名）、薩摩（31名）、長州（13名）が多いのは当然ながら、仙台、福岡、水戸（それぞれ7名）をはじめ全国の藩にわたっている。それは、大阪の私立オランダ語学校ともいうべき適塾（塾主、緒方洪庵）に、ほとんど全国各地から集まっているのと同じ傾向である。

ちなみに、適塾に入塾した者637名中、20名以上の者を出した国は、肥前、周防、越前、加賀、備中、長門、伊予、安芸、武蔵の9ヶ国にもわたっている。

なお、幕末留学生の留学国は次の通りである。

米国47名、プロイセン1名、オランダ17名、フランス32名、

ロシア6名、イギリス47名、香港2名、

複数国にまたがった者はいずれか一国にして算入した。

(四) 清国の場合

(i) 中国の伝統的考え方

陳舜臣氏は次のようなエピソードから日本文化と中国文化の違いを指摘している。

NHKがシルクロードの取材を行ない、招かれて行った陳氏は、中国側のシルクロードへの関心の薄さに驚いたというのだ。

そこから陳氏の推測が始まる。

日本人の意識の中には、我々の先祖はどこか別の所から来たのだという前提がある。

柳田国男は南の島からやってきたといい、騎馬民族が日本にやってきたと

いう説もある。また、日本人の考えの前提には、自分達の文化の源はどこか外にあったのだという考えがある。だから文化の伝播路であったシルクロードに日本人は強い関心を示す。

自分は他所からやって来て、文化というのは色々な所からのものが混じり合っているということが思考の根本にあれば、結果として、外部の文化に非常に順応性を帯びてくる。文化というものは伝わってきたものだから、もともとは自分達のものではなかったということになると、捨てるのも早いし、取り入れるのも早い。筆者は陳氏のこの考えに同感することが多いし、これが日本人の好奇心の強さの大きな原因ではないかと思う。

中国人には、文化は黄河の中流地域に興った、自分達の所で生れたもので、他所から来たものではない、という意識が根底にある。

だから日本人のようにルーツ探しをしようという熱意もなく、シルクロードといっても関心を示さない。

中国は国土的にも、古来より東アジア随一の大国で、必然的に諸小国の上に立ち、宗主国として君臨する時代が続いた。

文化を生み、育てたという自負と、国土が広く、人口が多いという大国意識から、中国が世界の中心である、という中華思想が生れ、これが連綿と何千年にもわたって続いたのは、ある意味では自然であったともいえよう。

伝統的な対外国観は「華夷思想」である。

文化は漢民族のみで、これに順応し、漢民族の王朝に帰服するものには無限の寛容を示すが、そうでないものは夷、すなわち野蛮なものとして侮辱し、排斥する。中華文化の影響の少ない周辺国は、山犬や狼のようなもの——夷狄は豺狼なり——である。

中華の天子の徳が十分に行われている所が文化的に最も秀れており、それ以外では天子の徳化にどれだけ浴しているかによって文化の程度が区別される。従って、周辺国は中華文化の影響度によって判定され、朝貢関係はあっても、対等な関係などあり得ない。もちろん、対等な商取引による貿易などあり得ない。貢物を奉るのなら受け入れ、天子の恩恵として中華の物産を下

賜する。

文化は中華のみにあり、夷狄を中華文化に浴させることはあっても、中華が夷狄の文化の影響を受けることなど、あり得ないし、あってはならない。

このような伝統的考えをさらに牢固なものにしたのは、二千年以上にわたり中国思想界に君臨してきた儒教であり、千三百年間にわたって政治、文化にきわめて大きな影響を与えてきた科挙であった。

儒教は、古代のみに価値を置く、尚古主義が根底にあり、好奇心を野蛮なものとして強く卑むところにその特徴がある。

また、儒教の重んずる「礼」は秩序維持に重要な役割を持つが、形式化されやすく、形式主義になってしまった。

漢の武帝は儒教を国教と定めたが、以降、清の滅亡までの二千年間、儒教の国教的地位はゆるがなかった。隋の煬帝の始めた高級官吏登用試験の科挙も清末に至るまで、中国の指導者層にきわめて大きな影響を与えてきた。中国の文化、思想を知る上で、儒教と科挙を抜いては考えられない。

(ii) 中国の政治思想に大きな影響のあった科挙制度

南宋晩期の人、意如愚はその著「山堂考索」で、「漢に淵源し、隋に始まり、唐に成り、宋に盛んになった」と、科挙制度の沿革を鳥瞰している。宋以前の中国史の特色の一つは、歴代の天子は、血縁を中心とする貴族の力を弱め、天子による独裁の中央集権制度の確立をめざすことだった。官吏登用試験によって貴族以外からも広く人材を天下に求め、天子が選んだこの官吏団を天子の直轄下におき、家系貴族の勢力を割こうとした科挙制度は、隋の煬帝により大業2年(606年)に始められた。幾多の変遷があったが、この制度が固まったのは宋の時代である。この時代より、科挙が官吏登用の正系となり、科挙に合格しない限り、高級官僚にはなれなくなった。

科挙には、大きく分けて文科挙と武科挙の二つがあるが、宋以前も、その後も、文官のみ世上の尊敬を受け、武官はほとんど顧みられない中国の国風から、科挙といえば文科挙を指すようになった。武官の地位はきわめて低く、

大きな軍事行動を指揮するのは天子から直接命令を受ける文官であった。

文科学も、唐代までは、明経科（経書、歴史）明法科（法律）、明学科（習字）、明算科（算数）といったものがあつたが、もともと儒教に色濃い技術軽視の傾向から、これらのコースは軽んじられ、詩賦を試験内容とする進士科に人気が集中し、宋以降は科挙といえば進士科のみを指すようになった。

中国では、最高の政治とは、天子の徳を遍^{あまね}く天下にほどこすことにある。それは周辺の夷狄の国にも中華の文化の栄に浴させることも含まれている。天子一人ではそれはむずかしいから、天子に代ってこのようなことのできる官僚が必要となる。だから官僚に必要な資質は、天子の徳を具現化でき、中華文化の精髓を理解した者でなければならない。中華文化の精髓とは具体的には中国の古典である。進士科の試験内容は一口でいうと、この古典の読書量のテストといってよい。

宋以降は王侯貴族はなくなった。世間から高い尊敬を受け、一族が何代も潤うような財産を得、また大きな権力を行使できる高級官僚になるには科挙に合格するしかない。科挙は一部の例外を除き、誰でも受験できたから、読書人層の家は誰もがこの試験をねらい生涯をかけて受験し、50歳で合格した者は若い年代に属す、とさえいわれた。

一族から科挙合格者を出すと、その一族は大いに繁栄する。しかし、これは世襲制のものではないから、科挙合格者が死ねばその役得はなくなる。だから、やがては、元の木阿弥の貧乏になってしまう。学問ができる者があると一族が必死になって、科挙受験を応援した。

娘を嫁入りさせる時には、裏に「五子登科」と铸込んだ、銅の鏡を持たしてやる。日々使用する鏡だ。五人男の子を産んで五人とも科挙に合格して欲しいという一族の切なる願いである。妊娠すると、暇があれば、詩経を読んでもらって聞く。詩経は科挙の重要な科目だ。母親の腹の中にあるうちから、これを聞かす。

男の子が生まれると、召使いなどに、「状元及第」と铸込んだ錢をまいて拾

わせる。状元とは科挙のトップ合格者のことである。状元及第は親や一族の最大の願いだ。

科挙は詩賦の試験でもある。中国文学の特長は創作よりも博学に重きを置くのが伝統だ。この詩賦では古典からの故事熟語をちりばめないと採点者が承知しない。だから詩賦の制作には何よりも博覧多識が必要だった。

数え年五歳で家庭教育が始まり、8歳から15歳までは塾で学ぶ。

陳独秀はその自伝「実庵自伝」で、次のようなことを書いている。

「科挙に合格してはじめて高官になれる。高官になってはじめて大金持となる。大金持になってはじめて農地や土地を買うことができる。地主になってはじめて大邸宅を建てることができる。そうして一族を栄えさせ、祖先の名前を輝かせることができる。……

姑が息子の嫁を丁重に扱うか、冷たく扱うかは、全て息子が科挙に合格するかどうかで決った。夫が科挙に合格すれば、舅と姑は嫁を頭上に持ちあげて敬うものの、科挙に合格しなければ使用人並みである」

「独身者が科挙に合格すると、名家からの縁談が雨のように降ってくる」
学ぶといっても、医学・薬学、技術などは労働者階級のやること、算数は町人のやることだ。科挙を目ざす読書階級の子弟のやることは古代の聖人の教えを書きとめた「四書」「五経」など儒教の経典を学び、中華文化の精華である詩や文章を作ることを学ぶことである。

最後の科挙となった光緒30年(1904年)に第三位(探花と称された)で合格したしょうえんりゅう商衍鎏の「科挙試験の回憶」によると、まず「三字経」(字画の少ない三字による文章で書かれたもの。全部で二五字)から入り、次は「千字文」。四字句が合せて二五句の千字からなっている韻文で、一字も重複していないから、これで学問の基礎となる字を覚えることとなる。

これが終ると、「論語」、「大学」、「中庸」、「孟子」の四書を学ぶ。

その解釈は朱熹の注によらなければならないので、本文を読む時はこの朱熹の注も読む。

四書は科挙の基礎となるものだから、注とともに数え切れないくらい読み

かえし、全部暗記する。

四書の次は五経の「詩経」、「書経」、「易経」、「礼経」、「春秋」。

四書と同じく全て暗記するが、注は読まない。これがすむと、「孝経」、
「公羊伝」、^{くよう}「穀梁伝」、^{こくりよう}「周礼」、^{しゅうらい}「爾雅」の必読古典を読み、その合間に唐代や宋代の五言絶句、七言絶句の詩を暗誦して詩の調子と格律を勉強する。また、対句を作り、「十七史蒙本」で平仄（^{ひょうそく}漢字の声調）の調子を学ぶ。この蒙本は一句が四字からなり、それぞれの両句が一つの韻を持っている。それぞれの句はすべて古典から出典のものだ。これらの本も暗記しなければならぬ。書は士大夫にとって最も重要な教養だから習字も不可欠。但し、どんな書体でもいいというものではない。科挙の答案は館閣体という書体で書かねばならぬから、館閣体の書法のみに限られる。

遊びたい盛りの子供に、これらの勉強を強いる。今のうちに苦勞して書を読んで科挙に合格すれば、土地も邸宅も、黄金も、美女も自ら手に入るといふ意味の詩を読ませる。

富家不用買良田（富豪となるに良田を買うを用いず）

書中自有千鍾粟（書中自ら千鍾の粟あり）

安居不用架高堂（安居するに高堂を架すを用いず）

書中自有黄金屋（書中自ら黄金の屋あり）

娶妻莫恨無良媒（妻を娶るに良媒なきを恨むなかれ）

書中有女顔如玉（書中女ありて顔玉の如し）

そうして、この詩は次の句で終る。

男子平生の志を遂げんと欲せば

六経を勤めて窓前に向って読め。

科挙に挑戦するものは、県単位の県試、府単位の府試、省単位の院試といった試験を受け、科挙の第一次試験ともいふべき郷試受験の資格を得なければならぬ。

郷試は3年に1回行われる。大体百倍の難関だ。これに合格すると挙人という資格を得る。翌年3月、北京で挙人を対象とした第二次試験の会試がある。郷試の試験責任者は学政（提学）で省の最高官僚の総督、巡撫と対等の地位を持っている。

会試の責任者は文部大臣にあたる礼部尚書。清朝時代には1万数千人の挙人が受験し、およそ320人くらいが合格する。

合格者は会試で自分の作った答案を木版印刷して一族、知友に配布する。これを会試墨巻という。

会試合格者は貢士と呼ばれ次に持っているのは、天子自らが行なう殿試である。これに通ると進士となり、生涯肩書に記して名誉とする。

進士に及第することは、古来至難中の至難とされ、唐代の諺にすでに「五十少進士（50歳で進士となるのはまだ若い方）」というのがあった。

殿試のトップ合格者は状元、2番は榜眼、3番は探花と称せられ、直ちにそれぞれ、翰林院修撰（状元）、翰林院編修（榜眼と探花）に任ぜられる。翰林院は主として天子の詔勅を起草する所で、最も権威のある部署である。

清朝では雍正帝の時代、殿試のあと、もう一つの試験をして、上記3人以外で翰林院に残す者を選抜するようになった。試験の結果により3グループに分けられ、第1グループに選ばれた者は、翰林院見習の庶吉士に任ぜられ3年の勉学を命ぜられる。第2グループは中央政府の下級官僚、第3グループは地方の知県などに任用される。3年間勉学した吉庶士は再び試験を受け、第1グループは翰林院の本官たる編集、もしくは検討に任じられ、第2、第3のグループは中央政府、地方政府の官吏に作用される。試験内容はすべて詩文である。

官職では文章で以てする職務が一番尊敬され、昇進も早い。翰林院はもちろんであるが、宮中に設けられた「昭文館」、「史館」、「集賢院」、「秘閣」などの館閣にあって、文章の修撰、校理などに任ぜられて「館職」となると出世は間違いない。宰相の書記官である知制誥、天子直属の書記官たる翰林学士となると副宰相、宰相も夢でなくなる。

随の煬帝が大業2年(606)年に始めて以来、1300年の長きにわたり中国人の思想を固く形づくってきた科挙が廃止されたのは清末の光緒30年(1905年、明治38年)であった。科挙制度の廃止が知識人に与えた悲劇の最たるものは科挙に挑戦し続けてきた中高年の読書人であった。

中国人のあこがれの理想像は状元だった。

郷試の首席合格者は解元と呼ばれたが、誰が解元になるかを予想する「闈姓捐^い」という公営賭博があつて、これで大金が集まった。科挙に体する一般の関心がきわめて高かったから、このようなことができたのだ。

「大学」に有名な次の文言がある。

格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、治国、平天下。

身を修めるには心を正しく、意を誠にしなければならない。この正心、誠意を身につけるためには格物、致知、すなわち物の道理をきわめ、学文を修得しなければならない。

これができたとしても世に登用してもらわなければ自己を発揮できない。世に登用されるということは科挙に合格することで、これによって国を治め、天下を平にすることができる。この意味で、科挙に通ることは、中国的価値の最高善であるともいえた。

この科挙制度が1300年にもわたって続いたことは中国政治文化史に測り知れぬ影響を与えた。

(iii) 清朝末期の外国文化への「好奇心」

3000年にもわたって、自分が第一と思ってきたのだから、他のものに関心を示さない。

何十年間も気嫌いじみた古典暗記の勉強を続け、中年になってやっと科挙に合格した人々は、やっとこれからは地位と名誉と財産と美女と思ひ、他に関心を示す余力など残っていないのが普通であろう。

外への関心がないし、自分を中華と考え外国を夷狄と考えているから、朝鮮や日本の事を知ろうともしないし、西洋のことを知ろうともしない。日本では蘭学が興って、オランダ語を学ぶ人々の層が厚くなり、医学、天文学、理工学、博物学、兵学などの西洋の学問が系統的に学ばれていった。

長崎に海軍伝習所を作るため来日し、後にオランダ海軍大臣となったカッテンディーケが日本と清国とを比較して驚ろいたことの一つに、日本にはオランダ語の日本人の通訳がいるが、清国(上海)には通訳がないことだった。

日本では若い俊秀たちは争ってオランダ語を学び(緒方洪庵の適塾が特に有名)、医学を志す若者の夢は長崎遊学だった。

清国の読書人階級(士大夫階級)の若者(や中年者)の夢は、自国の古典を暗誦して、科擧に合格することだった。夷狄の言葉を学ぶことなど沙汰の限りともいえた。結局、西洋の列強は自国の外交官にシナ語を学ばせるより他に道はなかった。

中国では、明代末にジェスイット派の宣教師を通じてヨーロッパの学問が紹介されたが、関心がない所で根づくはずがなく、清朝に入ると中絶してしまい、日本の蘭学のような系統的なヨーロッパの学問はついに発達しなかった。

日本で蘭学が発達し、清国でこれが発達しなかった理由は、やはり両国の国民の好奇心の強弱によるものといってよからう。日本の蘭学者の行動を見れば、彼らを動かしたのは、好奇心以外に考えられようがない。

宮崎市定京大教授は、日本が明治期に入って、幾たびかの危機はあったが、独立と国家の面目を保ち、西洋式の近代産業を根づかせることができたのは、蘭学のおかげといている。清国がこれに失敗したのは、日本における蘭学のようなヨーロッパ研究の学問がなかったからだ、ともいう。

これは、両国国民の好奇心の強弱による差といってもよからう。

清国と比べ、幕末の日本人の西洋文化への好奇心は、西洋列強の植民地化という恐怖があったことはもちろんだが、特に強いものがあつた。そうして、その伝統は200年にわたる蘭学の伝統の上に可能であつた、ともいえる。そ

れは、いわゆる蘭学者だけに止まらなかった。れっきとした藩に仕える、儒学を学んだ武士の間でも蘭学学ばざるべからずの気風が強かった。その一例として、佐久間象山の建白を次に記す。

「さて、學術一致と申す義、初めより章句訓話の末節を申すには御座なく、道德・仁義・孝悌・忠信等の教へは尽く漢土聖人の模訓に従ひ、天文・地理・航海・測量・万物の窮理・砲兵の技・商法・医術・器械・工作等は皆西洋を主とし、五世界の所長を集めて皇国の大学問を成し候義に御座候」

歴代の中国王朝は自国を天下国家であると考えた。自国を中国と考え、周辺国は、東夷、西戎、北狄、南蛮と呼び、これら周辺国の住民は豺狼の如き蛮人であると見なした。

これらの蛮国に、中華の文化に浴させることが天子の役目であるとされた。だから伝統的に他国のことには殆んど関心を示さない。

貿易に関しても相互の利益という立場は考えられない。相互の利益ということは、相互が平等という概念が入り込み、中華思想がそれを許さない。

乾隆帝（在位1760～1820）が通商使節として清国にやってきたマカートニー卿に与えた英国王宛勅諭には「天朝は物産豊盈、有らざる所なく、^も原と外夷の貨物に藉^よって以て有無を通ぜず」とし、本来は外国の品など必要としないが、天朝は遠人に恵を加え、四夷を撫育するため交易に応じているにすぎない、とした。

中国の天子は単に中国の主権者であるばかりではなく、世界人類の共通の主権者であり、外国の君主も臣下でなければならない、という古来からの伝統的思想がある。だから、中央政府に朝貢国を扱う役所はあるが、対等な国と外交交渉を行う役所は、清朝の末期までなかった。

雍正帝の勅諭にも「則ち天朝は^も豊に小邦と利を争うべけんや」という言葉もある。

だから、中国の支配層（読書人階層）は外国に対して殆んど関心を持たなかったし、まして外国を学ぼうとしたり、外国の書物を読もうとしなかった。清国人の中華思想の強さは、これに接する外国人にへきえきした感情を与

えたようだ。

島津斉彬は清国を次のように評している。

「清国も早く政治を改革し、軍備を整へ、日本と一致する時には、英、仏も恐るに足らずといへども、清国は日本を見ること属国の如く思ふ故、とても日本と一致は覚束なし。

清国は一体高慢にして、国の広きを自慢し、我より上なしと云ふやうなる風俗なれば、日本と心を合はせることなど思ひよらざることなるべし」

「支那も近代阿片の乱よりして、内外の混雑となり、真に危急存亡に臨めるも、時勢を弁ぜず、驕慢の国風よりして土地も割き与えたるなり。必竟、^{ひつきょう}彼を知り、己れを弁へ、彼の長を採り、我の短を補ふの場に至らず、今日の辱めを受くるに立ち至れり」

しかし、アロー号事件、アヘン戦争と、西洋列強の軍事力の前にいとも簡単に敗れると、西洋の国々の武器の優秀さを認めぬ訳にはいかなかった。彼らのいう「船堅礮利」すなわち、軍艦が堅牢で、大砲の精度が高いことだ。

これらの兵器は西洋に学ばねばならないとする「洋務運動」が起った。主唱者は、清朝の有力者、曾國藩、李鴻章、張之洞といった人々でいずれも科挙合格の進士である。

そうしてこれらの考えは、「中体西用」論とも呼ばれる考えをバックに行われようとした。中学（中華の伝統学術）は「道」すなわち根本原理についての学問である。

西学（西洋の学問）は「器」つまり具体的な道具についての技術にすぎない。中学は本体、根本理念の学問で次元が高いのに対し、西学は、実用、枝葉末節、次元が低い技術だ。中華では古から既に「器」の学はあった。これが西洋に渡っていったのであり、西学はもともと中華から伝わったものだ、と清国人は考えた。

「中体西用」論は、「道先器後」論ともいわれ、このような理屈づけをしなければ、誰も西洋の事を学ぶ心理的心構えができなかった。それだけ、中

華意識が強く、外から学ぶことを恥辱と考えたのである。

「中体西洋」論も、「道先器後」論も、末梢の技術に関しては西洋は秀れていても、根本となる思想や文化は中国の方が段然秀れているという考えだ。

だから初代駐英大使の郭嵩燾^{かくすうとう}が帰国後「使西紀程」という滞欧記を書いて（日本風にいえば明治12年刊行）、西洋には末だけでなく、本もある——中国以外にも「文明」はある——と書いて、ごうごうたる批難を浴び、発刊は停止された。

伝統的な中華思想からみれば、西洋に「本」があってはならないのである。

(iv) おわりに

政治思想、医学、理工学以外でも日本人と中国人の好奇心の違いは顕著であった。

美術面に関しても、飛鳥、白鳳期の高度の建築、彫刻は、中国、朝鮮から入ってきた。水墨画も室町期に明国から入ってきた。日本人にとって美術の淵源は外国から入ってきたという頭があるから、貧欲に外国美術を採り入れようとする。筆者は上杉謙信が愛用していたと伝えられる、南蛮渡来の深紅のラシャ地のマントを見て、何とハイカラなものを着ていたのかと驚いたことがある。

それは絵画の世界での西洋画への好奇心に関してもいえることであった。

平賀源内や司馬江漢は西洋画の油絵に関心が深かった。北斎は油絵も描いている。応挙は西洋画の遠近法で採り入れた絵を描いた。渡辺華山も西洋画に関心が強く、さし絵の入った蘭書は可能な限り買おうと心掛けたし、できなければどんな小さなさし絵でも自身で縮図（模写）をとった。

日本で初めて本格的な西洋式油絵を描いた高橋由一は苦心惨憺してこれを習った。油絵具も筆もカンバスもなく、師は横浜の外人であった。香川県の金刀比羅宮に数多く残されている彼の遺作を見ると、高橋由一の作品は当時の西洋のレベルと比べても遜色がないのではないかと思わせる。明治になる

と西洋画をやろうという若者は続々とパリに向った。そして、藤田嗣治に到って西洋のトップレベルに到達する。

藤田の絵が欧米できわめて高価な値段で売買されていること、本人がフランスのサロン・ド・トンヌの無審査出品員に選ばれたこと、彼の作品が欧米の著名美術館に展示されていること、から彼の絵が本場でトップレベルの評価を得ていることは間違いない。

中国では1842年の南京条約によって開国する以前から西洋との接触は深かったが、西洋画に関しては全く興味を示さなかった。

この点でも日本と対照的であったといえる。清朝末以降、中国からも西洋へ派遣された画学生は少なくなかった。

ただ、中華意識の強い彼らは西洋画の神髄に触れ、これを学ぼうという好奇心ないし意欲は少なかったようだ。近代洋画に関してもルノアールの俗、セザンヌの浮という悪評を投げかけ、学ぶところなし、とし帰国後は専ら伝統的な国画に転向し、古画の臨摹^{りんも}模倣に努めるようになった。清国では画家は画工として、読書人階層からは強く貶められていたという事情もある。

日本の画学生は欧州で物狂わしいまでに、西洋画を随喜渴仰して学び、日本画と併立する洋画という分野を作りあげていった。

参 考 文 献

(一) はじめに

(1) 「半導体産業の軌跡——日米攻防の半世紀——」 谷光太郎, 日刊工業新聞社 1994, P.101, PP.246-247

(二) 産業振興の根本は「好奇心」

トランジスタ発明のニュースに接した後の日本人関係者の反応と動きについては次の(1)に詳しい。東北大関連については(2)参照

(1)「日本の半導体開発——超LSIへの道を拓いた男たち——」中川靖造, ダイヤモンド社, 1981年

(2)「西澤潤一の独創開発論」西澤潤一, 工業調査会, 1986年, PP.61~62

(3)「火縄銃から黒船まで」奥村正二, 岩波新書, 1973年, PP.28~29

(三) 日本の場合

(i) 西洋人が見た日本人の好奇心

(1)「江戸産業のルネサンス」小島慶三, 中公新書, 1989年 PP.22-23, PP.47~48, P.74, PP.164~165

(2)「ペリーと日本」S・モリソン, 後藤優訳, 原書房, 1968年 PP.280~281

(3)「大君の都——幕末日本滞在記——(下)」オールコック, 山口光朔, 岩波文庫, 1962年, PP.149~150

(4)「日本幽囚記(下)」グローニン, 井上満訳, 岩波文庫, 1948年, PP.31~32, P.35, P.38

(5)「エルベ号艦長幕末記」R・ヴェルナー著, 金森誠也, 安藤勉訳, 新人物往来社, 1990年, PP.90~93.

「三兵衛古知幾」については(6)参照

(6)「江戸の開明思想」, 杉浦明平, 別所興一, 社会評論社, 1990年, PP.192-193

(ii) 日本人の「好奇心」の淵源

(1)「一九九〇年の日本」, 山本七平, 福武書店, 1983年, PP.26~27

(2)「山本七平の知恵」, 谷沢永一, PHP研究所, 1993年 PP.100~101

(iii) 指導者の「好奇心」の強さの一例

(1)「鍋島閑叟」, 杉谷昭, 中公新書, 1992年, P.21. PP.24~25

(2)「島津斉彬公伝」, 池田俊彦, 中公文庫, 1994年, PP.378~381, PP.404~405

(3)「江戸期の開明思想」杉浦明平, 別所興一, 社会評論社, 1990年 PP.204~216

(iv) 幕末期の海外留学生派遣

(1)「島津斉彬公伝」前出 PP.522-525.

(2)「薩摩藩英国留学生」, 大塚孝明, 中公新書, 1974年, PP.9-13

(3)「近代日本の海外留学史」, 石附実, 中公文庫, 1992年

(4)「鍋島閑叟」前出, P.111, 適塾関係

(四) 清国の場合

(i) 中国の伝統的考え

(1) 「歴史から今なにを学ぶか」, 梅原猛, 奈良本辰也, 渡部昇一, 陳舜臣, 講談社, 1981年, PP.127~129

(2) 「中国文化史——近代化と伝統——」野原四郎, 増井経夫他, 研文出版, 1981年, PP.106-107, PP.115~116.

(3) 「儒教三千年」, 陳舜臣, 朝日新聞社, 1992年, PP.232~233

(4) 「歴史の交差点にて」, 司馬遼太郎, 陣舜臣, 金達寿, 講談社, 1984年, P.70

(5) 「この国のかたち, 102」司馬遼太郎, 文芸春秋, 1994年9月号, P.79

(ii) 中国の政治思想に大きな影響を与えた科举制度

(1) 「宮崎市定全集15 科举」岩波書店, 1993年。

(2) 「歴史のなかの若者たち(5)——清末中国の青年群像——」横山宏章, 三省堂, 1986年。P.13, P.38, PP.40~42, PP.43~47

(iii) 清朝末期の外国文化への「好奇心」

(1) 「長崎海軍伝習所の日々」カッテンディーケ, 水田信利訳, 平凡社, 1974年, P.153

(2) 「宮崎市定全集16, 近代」P.37

(3) 「江戸期の開明思想」前出, PP.204-216

(4) 「儒教三千年」前出, P.158, PP.162-165

(5) 「宮崎市定全集23, 随筆(上)」P.533

(6) 「中国文化史——近代化と伝統——」前出 PP.115~116

(iv) おわりに

(1) 「宮崎市定全集23随筆(上)」
前出, PP.704~705

〈備考〉中国の呼称については下記参照

(1) 「『支那』は蔑称ではない」高島俊男

「諸君！」1994年12月号, PP.156~165

(2) 「『中国』とはどんな意味か」高島俊男

「諸君！」1995年2月号, PP.168~176

(3) 「宮崎市定全集随筆(下)(24)」岩波書店, P.646, P.679, P.711

(4) 「中華帝国の解体」黄文雄, 亜紀書房, 1994年, PP.2~6